

古墳時代後期の朝鮮半島系冑

内山 敏行

要約（著者抄録）

1. これまでの研究

2. 分析作業

2.1. 朝鮮半島系冑の分類

2.2. 古墳時代後期の朝鮮半島系冑

2.3. 竪矧板鋲留式冑の時期——共伴小札・挂甲・遺物の検討

2.3.1. 渕の上1号墳出土小札の検討

2.3.2. 綿貫觀音山古墳出土挂甲の検討

2.3.3. 川上神社古墳出土遺物の検討

2.3.4. 椒浜古墳出土挂甲と遺物の検討

2.4. 倭製冑への影響

2.4.1. 竪矧広板鋲留式衝角付冑の分類と編年

2.4.2. 竪矧広板鋲留式衝角付冑の成立

3. 論議

3.1. 朝鮮半島の身分表示冑

3.2. 古墳時代中期と後期の朝鮮半島系冑と倭

3.3. 古墳時代後期の突起付冑と倭

要約（著者抄録）

日本列島の後期古墳から朝鮮半島系の竪矧板冑が出土する。その中には、三国時代の社会で身分を示した突起付冑を含む。倭の冑はそれらの形態を採用せず、製作技法だけを衝角付冑に採用する。以上を論じ、朝鮮半島の身分制と軍制に関わる人物が6世紀の半島一列島間交渉で往来・活動したが、その身分標識が倭に定着しなかったと考える。

1. これまでの研究

古墳時代後期の、衝角付冑以外の竪矧板鋲留式冑の製作地・起源地については、「中国」とする意見（王1990、梅沢1990）、「朝鮮半島」とする意見（福尾1989）、地域を限らないで広く「大陸」などとする意見（末永1934・村井1974・小野山1987・福尾1989）がある。倭の竪矧広板鋲

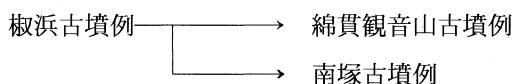
留式衝角付冑は、これらの堅矧板鉄留式冑から影響を受けて生まれたとする仮説がある（村井1974・小野山1987・野上1991）。資料が少ないので、どの意見も十分に論証されていない。

筆者は、1)これらの堅矧板鉄留式冑を朝鮮半島系の製品と考える。さらに、2)これらの朝鮮半島系冑と倭の衝角付冑を折衷して、倭で堅矧広板鉄留式衝角付冑が生まれたと考える。2)の点は小野山氏の意見に近い。今回の作業では、以上の点を論証する。

参考として、各研究者の意見を以下に紹介しておく。

末永雅雄 1934 和歌山県椒浜古墳の「蒙古鉢形冑」を「支那、朝鮮系のもの、若しくはその直接影響を物語る」ものとする（p.72）。また、福岡県正福寺所在（岩戸山古墳）の石人頭部の堅矧板冑から、九州と「支那や朝鮮との直接交渉」を推定する。（p.246）。

村井嵒雄 1974 椒浜古墳の「蒙古鉢形冑」と、大阪府南塚古墳の堅矧広板鉄留式衝角付冑を比較して、「広板を堅矧した鉢の構造は共通するものである。椒浜古墳と南塚古墳との年代的な先後関係が充分把握されないことは遺憾であるが、南塚古墳の堅矧広板の衝角付冑は、大陸に祖型をもつ椒浜古墳出土の冑の鉢の構造から生まれたのではないかとも考えている。」という。また、群馬県綿貫觀音山古墳の冑も「明らかに椒浜古墳出土の系統をひくもの」と考えている。つまり、次のような仮説らしい。



小野山節 1987 「綿貫觀音山古墳の冑は…（中略）…前面を円弧形にあけるやり方は中国では殷代から戦国時代までの青銅製冑に認められる特徴であるので、この冑が中国製かどうかはわからないが、大陸製と認めうるであろう。六・七世紀の古墳から出土する堅矧板鉄留衝角付冑はこの型式の冑にヒントをえて、生まれたのではないかと考えられる。」（p.144）

穴沢啄光 1988 「蒙古鉢形」冑や挂甲は、東アジアに比較的近い地域で開発され、ユーラシア各地に伝播したとする。日本の椒浜古墳・五条猫塚古墳例の原型は伽耶・古新羅地域にあり、五条猫塚例は日本から出土する眉庇付冑の工人が作った可能性を指摘している。椒浜例の製作地は論じていない（pp.729-730, 766）。

福尾正彦 1989 福岡県岩戸山古墳の石人の堅矧板使用冑を、筑紫君磐井の創出した「〔朝鮮〕半島的色彩の濃い独自の冑」と考える。また、群馬県綿貫觀音山古墳出土冑を「半島色というよりは、大陸色の強い冑」とする（p.101）。

梅沢重昭 1990 綿貫觀音山古墳の冑は「後世の蒙古冑と類似しており、北方騎馬民族の甲冑の系譜に位置づけられるものだろう。この異型冑の実物例は、中国や朝鮮半島地域にも明ら

かでなく、ただ、北魏などの墳墓に納められた俑の武人像等に、これに似た甲冑を表現したものがあるので、「觀音山古墳の挂甲、冑は舶載品の一つであった」として、「三国時代の中国本土に由来を求める」甲冑だと考えている（pp.78-79）。

王克林 1990 綿貫觀音山古墳の冑を、中国北朝製か、またはその系列につながる冑と考えている。

野上丈助 1991 椒浜古墳の「蒙古鉢形冑」は「舶載の可能性が強いが、今のところ断定はできない」。「六世紀に盛行をみる堅矧板銛留式の簡略化した衝角付冑は、横矧板銛留式の系譜はひくものの、その改良型とは思えず、蒙古鉢形冑の技法と合体した形式としてとらえる方が自然だと思っている。その合体が海のむこうであったか、列島内で行われたことであったかは今後の課題である。」（pp.114-115）

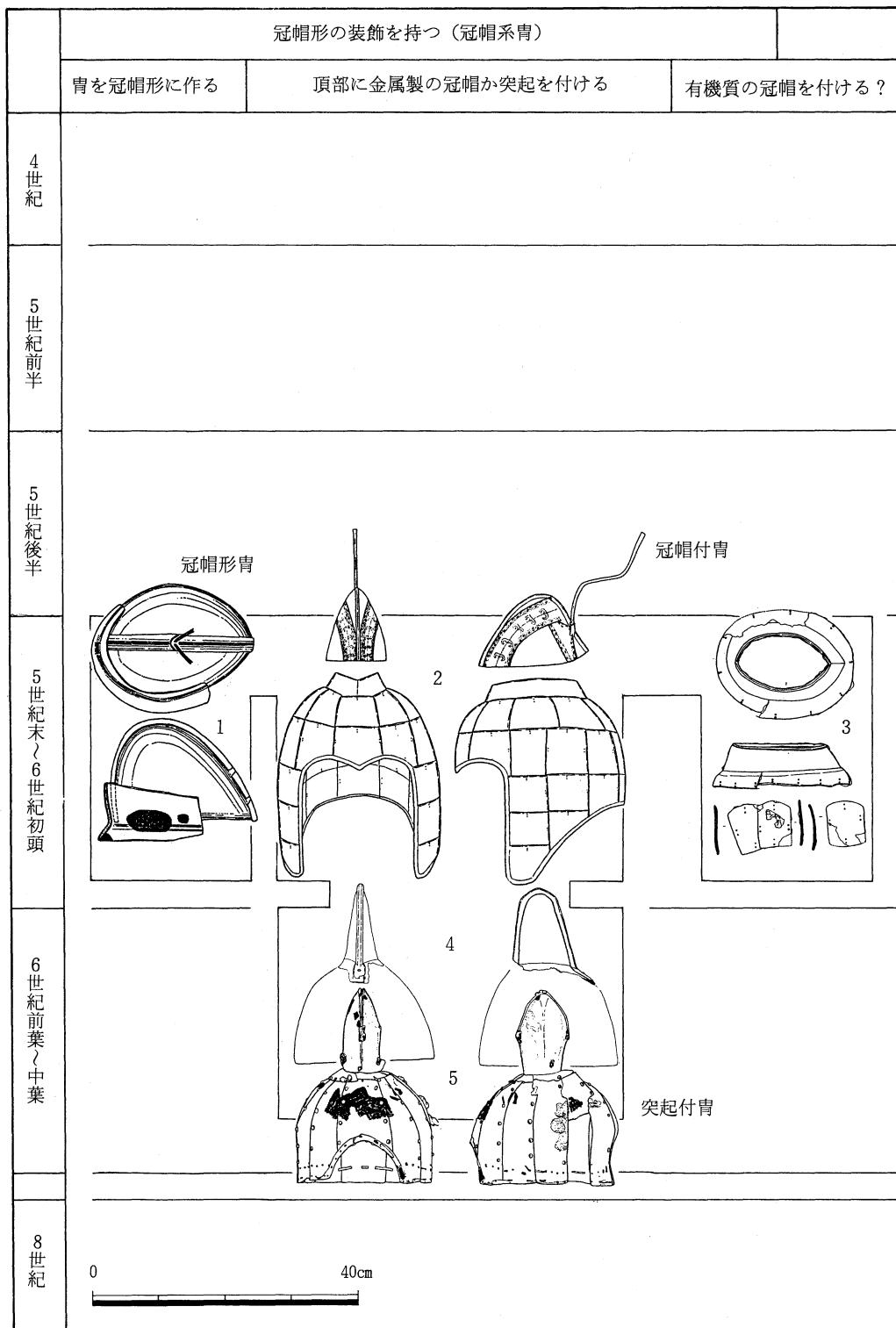
2. 分析作業

2.1. 朝鮮半島系冑の分類

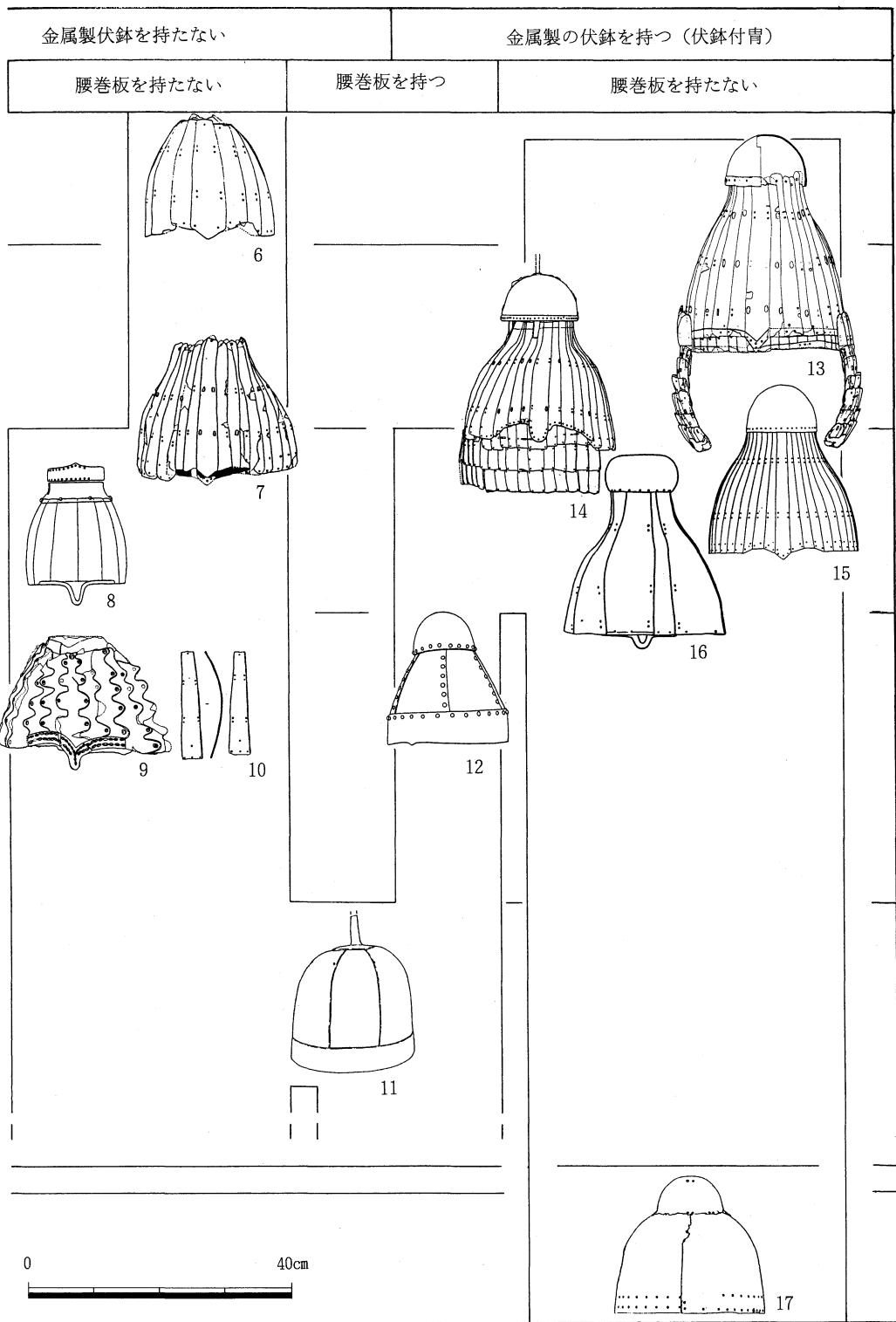
「朝鮮半島系冑」とは、朝鮮半島製の冑の系列（型式組列）の中に位置づけることができる冑をさす。仮に朝鮮半島製でなく、模倣製品であったとしても、この条件を満たすものは含む。

朝鮮半島系冑の形態（form）を、頂部の装飾に注目して次のように分類する（第1図）。この装飾は、着用者の地位または身分を示す可能性を持つ。





第1図 朝鮮半島系胄の分類と変遷



第1図 朝鮮半島系胄の分類と変遷 (S = 1/10)

- 1 伝慶尚南道 昌寧出土 穴沢・馬目1975、p.14.
- 2 慶尚南道 陜川 磻溪堤外A号墳 国立晋州博物館1987、p.59.
- 3 慶尚南道 陜川 玉田M3号墳 趙・朴1990、p.27.
- 4 日本 福島県 渕の上1号墳 筆者原図。
- 5 日本 群馬県 織貫觀音山古墳 梅沢1990、p.67.
- 6 慶尚南道 金海 礼安里 150号墓 釜山大学校博物館1983、p.156.
- 7 釜山 福泉洞10号墓 釜山大学校博物館1983、pp.67-68.
- 8 朝鮮半島南部 穴沢・馬目1975、p.16原図。穴沢1988、p.770の注(22)により改変。
- 9 慶尚南道 陜川 玉田M3号墳 趙・朴1990、p.28.
- 10 全羅南道 南原 月山里M1-A号墳 全1983、p.48.
- 11 日本 愛媛県 川上神社古墳 愛媛県史編さん委員会1986、p.529、写真からトレース。
- 12 日本 和歌山県 椒浜古墳 末永1934、図版16写真からトレース。
- 13 釜山 福泉洞21号墓 釜山大學校博物館 1990、pp.25-26.
- 14 釜山 福泉洞11号墓 釜山大學校博物館1982、pp.91-92.
- 15 慶尚北道 高靈 池山洞32号墳 金1981、p.33.
- 16 慶尚南道 陜川 玉田70号墓 趙1988、pp.237-238.
- 17 慶州 雁鴨池 文化広報部文化財管理局1978.

以上の形態 (forms) の胄を、製作方法に注目して、堅矧板 (細板・広板) 鈸留式、堅矧板革綴式、小札革綴式の各型式 (types) に分類する。堅矧地板は、断面が弧状のもの (第1図6、8~12) と、上部が湾曲してすぼまるもの (7, 13~16) にさらに細分できる (申1982、p.62)。

2.2. 古墳時代後期の朝鮮半島系胄

日本列島から出土している古墳時代の朝鮮半島系胄は、第1表の例がある。今回は、突起付胄と、他の堅矧板鈸留式胄を検討する。次に、突起付胄について説明し、それが朝鮮半島の冠帽系胄の系列に位置づけできることを示す。

福島県 渕の上1号古墳例 (第2図下、胄の写真は郡山市1973)

頂上部に突起を作りつけた胄 (突起付胄)。冠帽付胄 (第1図-2・3) が変化した形態の、朝鮮半島系胄だと考える。その理由は、1) 突起部の形が冠帽と同じことと、2) 外にふくらむ2枚の板を覆輪で合わせる製作法が金銅製冠帽と共通することである。

第1表 日本列島出土の古墳時代の朝鮮半島系胄

形態	型式	出土古墳	共伴小札・挂甲
(飾金具なし)	堅矧板革綴式	福島県いわき市 勿来金冠塚古墳 ^[2]	後期第3段階
"	"	静岡県磐田市 甑塚古墳 ^[3]	後期第1段階
(頂部に管あり)	堅矧板鉢留式	伝愛媛県川内町 川上神社古墳	不明
突起付胄	(堅矧板?)鉢留式	福島県郡山市 渕の上1号墳	後期第2段階
"	堅矧板鉢留式	群馬県高崎市 綿貫觀音山古墳	後期第2段階
伏鉢付胄	堅矧板鉢留式	和歌山県有田市 椒浜古墳	中期第7段階?

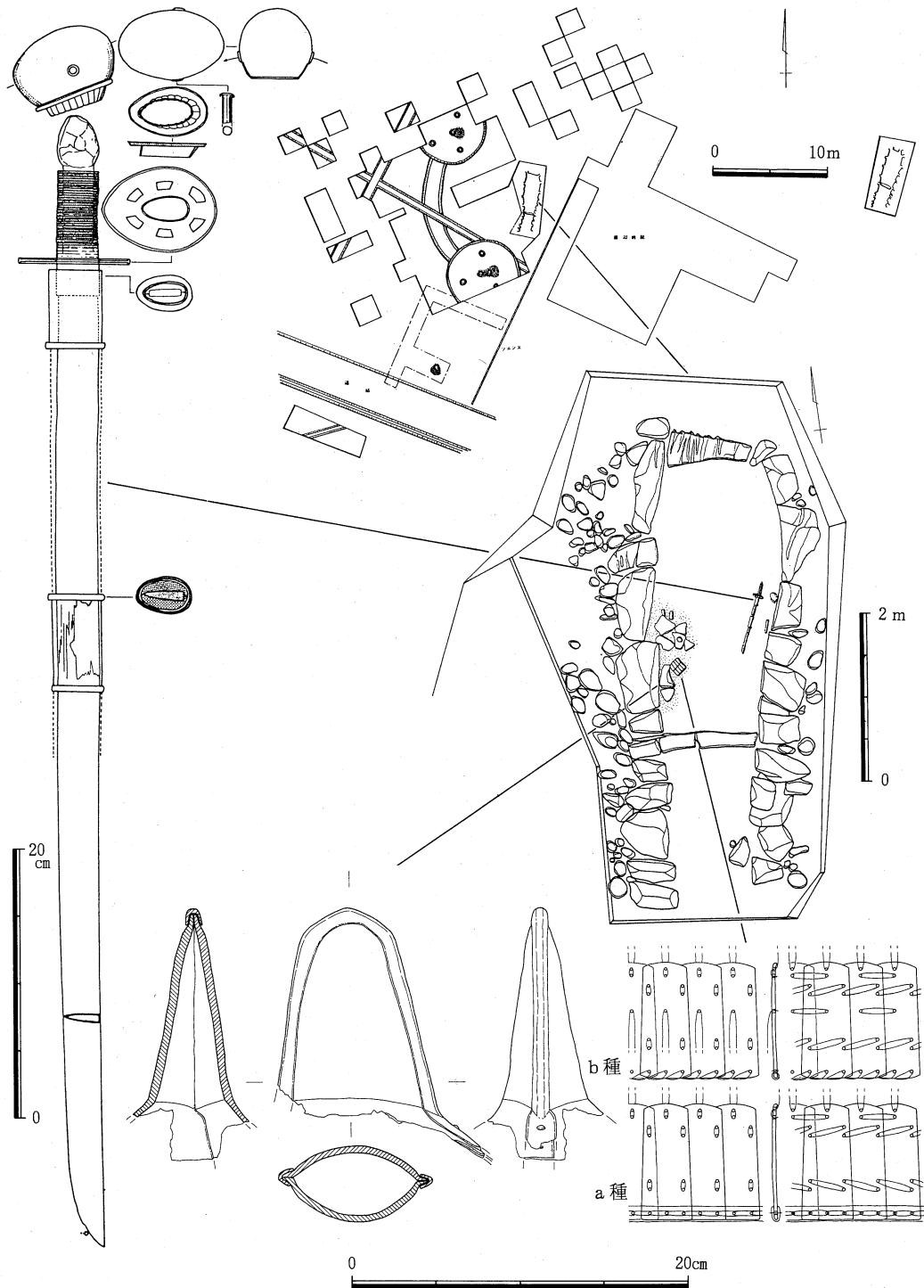
胄の本体は、突起とその周辺の破片が残る。内外面とも鈍い黒色で、漆塗の可能性がある。突起は2枚の鉄板を合わせ、鉄板被覆輪で覆う。覆輪の一端は、突起周辺の鉄板の縫目の上に伸び、そこで2孔をあけて鉢留する。鉢は1本が残り、もう1本は鉢孔だけが残る。鉢頭直径5mm。

突起の周囲の鉄板が胄の地板であれば、この胄は堅矧板鉢留式になる。ただし、地板とは別造りの伏板かもしれない(第1図2・3・5参照)。その場合でも、胄本体は鉢留式と考える。穴沢・馬目両氏はこの胄を革綴と考える(穴沢・馬目1986,p.224)が、革綴は見当たらない。おそらく、付属小札の革綴紐をそう判断したのだろう。

付属小札(鍔?)は、偏円頭形小札を革綴・革緘にする。a種:緘孔が2孔×1列のものと、b種:緘孔が3孔×1列のものがある。

最下段にa種(裾札)を使い、その上段にb種を緘す、鍔の可能性がある。b種の現存枚数が少ないため、段数の多い付属具にはならない。小札は約40枚分以上あって、a,b種を区別できるものはa種が12枚以上、b種は2枚以上ある。かさね方のわかる小札は18枚あり、右上かさね(?)が2枚、左上かさねが16枚ある。

緘法は各段緘で、革紐が上下段の間を千鳥に往復する。緘孔は2孔×4箇所。横綴の革紐が小札裏面で斜行線状になる。下揚孔・覆輪孔は3孔ある。a種(裾札)の下縁は、革包覆輪か、または織物被せの革包覆輪を菅糸(すがいと)で縫い付ける。縫い付け紐の残りが悪いが、表面で縫い付け紐自身を刺し貫いて固定する、本返し縫いの可能性がある。b種の下揚みは、革紐1本をラセン状に巻きつける。小札の長さ7.0cm、幅3.1cm、一枚12~14g。



第2図 福島県郡山市渕の上1号墳
調査区(1/600)と横穴式石室(1/80)(郡山市教育委員会1971)、
頭椎大刀(1/5、穴沢・馬目1977)、突起付冑と小札(1/4、筆者原図)

出土古墳は、直径20mの円墳の可能性があり、全長5.2mの横穴式石室を持つ（郡山市教育委員会1971）。金銅装・銀線巻柄の頭椎大刀を伴う（第2図左、穴沢・馬目1977）。

群馬県 綿貫觀音山古墳例（第1図5、群馬県立歴史博物館1990）

堅矧板鉄留式突起付冑である。この冑も、冠帽付冑の系統をひく朝鮮半島系冑と考える。突起は頂辺の伏板と一体にする。第1図2・3の頂辺の中折帽形鐵器（国立晋州博物館1987、p.48）と冠帽が結合したものだろう。突起は鉄板被覆輪を持たず、渕の上例よりも冠帽の形から離れている。突起付冑はまだ2例しか知られていないので、渕の上例より新しい製品かどうかは、すぐには決められない。

この冑には、中国製または中国起源説（梅沢1990、王1990）がある。しかし、中国の同時期の甲冑資料が少なく、証明できていない。中国からの間接的な影響を全く否定するわけではないが、中国製と考えない理由を2点あげる。

- 1) 今のところ、鉄板鉄留甲冑は朝鮮と日本に分布し、中国では知らない。鉄留甲冑は、馬冑・馬具などの製作技法から人間用甲冑に鉄留法を取り入れて、朝鮮半島で成立し、日本に伝播したものと考える。
- 2) 綿貫觀音山古墳の冑に伴う緘孔2列の小札（2.3.2.節）も、朝鮮半島南部と日本の地域色で、中国に見られない。伽耶地域では、冑の鍔・頬当（第1図7、9、14、16に伴う）や馬甲に緘孔2列の方頭形小札を使う。日本列島でも、甲冑と付属具に広く使う。中国の小札はすべて緘孔1列である。

以上の突起付冑2例の年代は、朝鮮半島の墳墓の編年から、6世紀中葉以降と考える。先行する形態である冠帽付冑を出土した磻溪堤ガA号墳（国立晋州博物館1987）や玉田M3号墳（趙・朴1990）が5世紀末～6世紀前葉とされるからである。この2基の陶質土器は、禹枝南（1986）編年のⅢ段階a期、定森（1987）編年の第Ⅵ段階、藤井（1990）編年の戊群であり、この年代が与えられる。

2.3. 堅矧板鉄留式冑の時期——共伴小札・挂甲・遺物の検討

日本列島出土の古墳時代後期（須恵器のMT15型式期～TK209型式期）の甲冑を4段階に区分すると、渕の上1号墳と綿貫觀音山古墳の小札や挂甲は、後期第2段階（須恵器のMT85号窯段階～TK43型式期）になると考へる。伝川上神社古墳例もその可能性がある。また、椒浜古墳の挂甲や共伴遺物は、古墳時代中期末（TK47型式期以前）と考へる。

2.3.1. 渕の上1号墳出土小札の検討——縫孔1列・偏円頭形小札の型式変化——

渕の上1号墳の胄に伴う小札（第2図右下）は、縫孔3孔×1列・偏円頭形小札・各段縫である。頭部が偏円頭形で、縦1列に並べた3個の縫孔を使い、上下の各2段ずつを縫す（名称は内山1987、清水1990参照）。

この系列の小札の型式変化を説明する（第3図4～8）。短くて幅が広く、下揚孔・覆輪孔を3孔持つものが後期第2段階に現れる。縫孔は2孔×2箇所（第3図8）または2孔×4箇所（第3図4）がある。第3段階から小札が長く幅が狭くなってゆき、下揚孔・覆輪孔が2孔のものが現れる。長い小札を綴じるため、縫孔は2孔×4箇所が主流になり、2孔×2箇所は第3段階までで消える。挂甲の草摺は、縫孔2孔×1列（清水1990の各段縫a類）が、第3段階から3孔×1列（各段縫b類）になる。挂甲の腰札は、第4段階に縫孔3孔×4箇所のものが現れる（第3図6）。

渕の上1号墳の小札は、後期第2段階と考える。幅が広く、下揚孔が3孔あることが基準である。縫孔が2孔×4箇所なので、奈良県藤ノ木古墳の挂甲胴部小札（清水1990のI型b類）に対比できる（第3図4左端）。

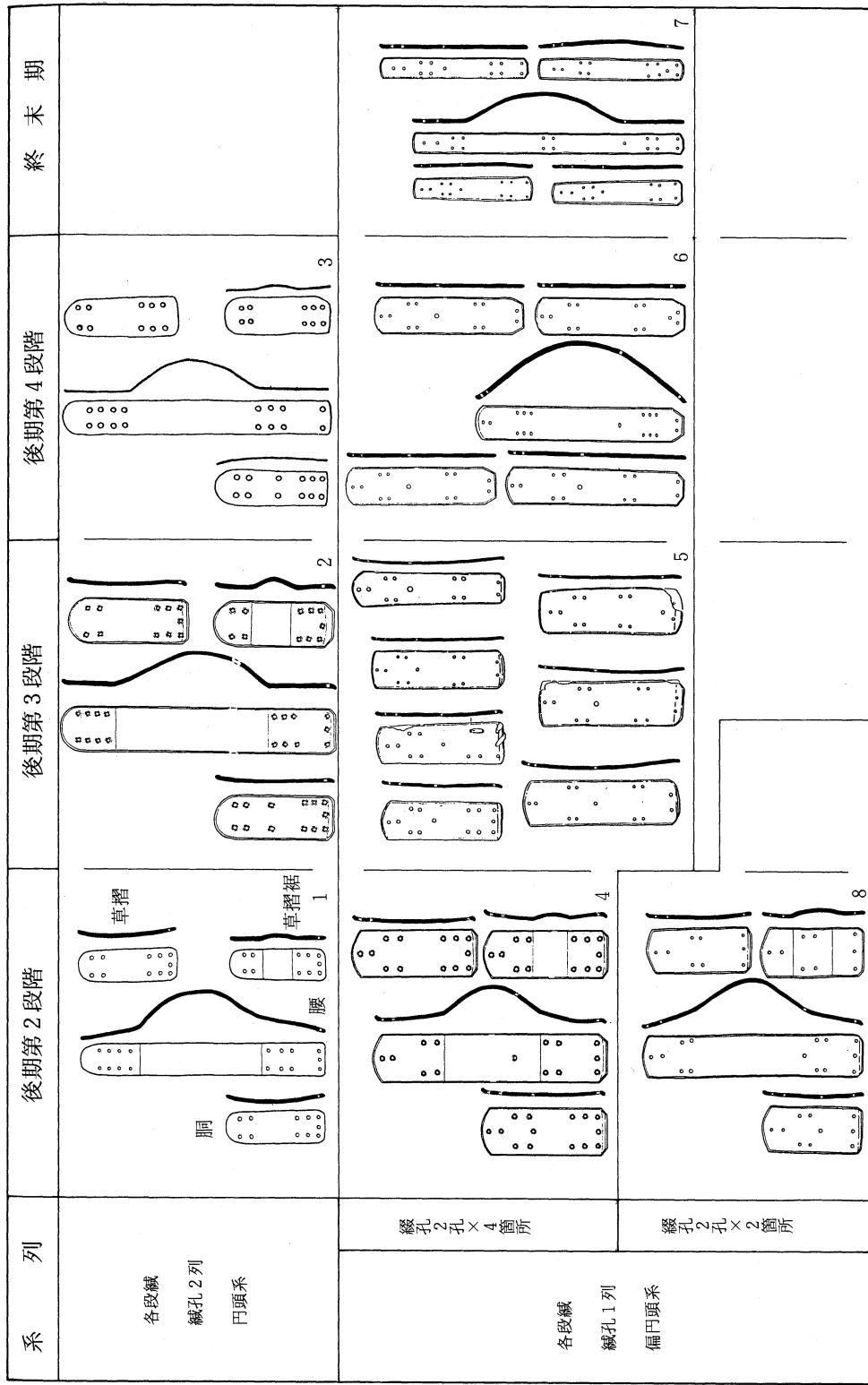
六窓倒卵形蟻を持つ頭椎大刀（第2図左）は、後期第3～4段階並行期まで年代が下がる（新納1984、滝瀬1986、桜井1987）。胄と同時副葬であれば、胄が伝世したことになる。

2.3.2. 綿貫觀音山古墳出土挂甲の検討——縫孔2列・円頭形小札各段縫挂甲の型式変化——

綿貫觀音山古墳は、後期第2段階の挂甲を2領副葬している。群馬県立歴史博物館（1990、p.44）に従い、挂甲をA・Bとする。「鎌」とされる小札（同前、p.44）が、突起付胄に伴うな

第3図 挂甲小札の編年（各段縫2列円頭系、各段縫1列偏円頭系）S=1／4

- | | |
|------------------|-----------------------------|
| 1 埼玉県永明寺古墳 | 栗原・塩野1969、p.60 図を注(4)により改変。 |
| 2 埼玉県小針鎧塚古墳 挂甲A | 船山・塚田1991。腰札の長さは両氏案より短く復元。 |
| 3 埼玉県小見真觀寺古墳 | 末永1934の第47図。 |
| 4 奈良県藤ノ木古墳 | 清水1990、p.45. |
| 5 千葉県城山1号墳 | 筆者原団。 |
| 6 奈良県飛鳥寺塔心礎 | 筆者原団。奈良国立文化財研究所許可済。 |
| 7 福島県八幡14号横穴 | 筆者原団。 |
| 8 群馬県綿貫觀音山古墳 挂甲B | 清水1990、p.373.一部改変。 |



第3図 挂甲小札の編年（各段縫2列円頭系、各段縫1列偏円頭系） $S = 1 / 4$

らば、それと同種の小札を使う挂甲Aが、この胄とセットの可能性がある。

挂甲Aは、縫孔2孔×2列の円頭形小札を各段縫にする。頭部が円頭形で、縦2列に並べた2孔ずつ計4孔の縫孔を使い、上下の各2段ずつを縫す。

この系列の挂甲の型式変化を説明する（第3図1～3）。いまのところ、後期第2段階に現れ、小札幅約2cm以下で狭い。第3段階には小札幅2.5cm前後の広いものが見られる。第4段階にはまた幅が狭くなり、この段階までで消滅する。胴部（豎上・長側）小札は、第2段階には縫孔2孔×2列（第3図1の左端、清水1990の各段縫a類）で、第3段階からは3孔×2列（各段縫b類）になる（第3図2の左端）。

綿貫觀音山古墳の挂甲Aは、後期第2段階と考える。縫孔2孔×3列の小札がないので、胴部縫孔が2孔×2列と考えられることと、小札の幅が狭いことが基準である。類例は埼玉県永明寺古墳例^[4]（第3図1）、同県小針鎧塚古墳の挂甲B（船山・塚田1991）、京都府太秦天塚古墳例^[5]がある。

挂甲小札の下掘孔が2孔である点から、これらの挂甲の時期を下げる意見もある。確かに、後期第4段階（須恵器のTK209型式並行）にも下掘み2孔の挂甲小札がある。埼玉県小見真觀寺古墳（第3図3）、群馬県諏訪神社古墳（東京国立博物館1983、p.204）にみられる。

しかし、綿貫觀音山・太秦天塚古墳の共伴遺物はそこまで新しいものを含まない。須恵器は觀音山がTK43型式並行、天塚が大型器台V～VI式（高橋・小林1990、MT15型式～MT85号窯段階並行）である。小針鎧塚古墳や太秦天塚古墳の剣菱形容杏葉も、TK43型式期までしか副葬されない品目である。

2.3.3. 川上神社古墳出土遺物の検討

伝川上神社古墳の堅矧板鉢留式胄（第1図11、愛媛県史編さん委員会1986）も、出土古墳の伝承が正しければ、後期第2段階の可能性がある。川上神社古墳は大阪府南塚古墳例と同一型式の舶載鐘形容杏葉を持つので、近い時期の遺物組成の可能性があるからである。南塚古墳の馬具（日本馬具大鑑編集委員会1990）のうち、鐘形装飾付馬具は新しい一群に属し、後期第2段階の胄を持つ追葬者に伴う遺物と考える。南塚古墳の埋葬時期は2.4.1.節で論じる。

ただし、川上神社古墳には横穴式石室が2基あり、胄・馬具・須恵器の出土状況が不明なので、遺物組成の確かな時期は検討できない。また、出土須恵器はすべてTK209型式並行であり、馬具の年代よりも明らかに新しい。

2.3.4. 椒浜古墳出土挂甲と遺物の検討

椒浜古墳の堅矧板鉢留式伏鉢付冑（第1図12）は、共伴する挂甲と遺物から、古墳時代中期後葉（須恵器のTK47型式期以前）の副葬品と考える。したがって、椒浜古墳例を後期の堅矧板鉢留式衝角付冑の祖型と考える説（村井1974）はとらない。時期が離れるからである。

椒浜古墳例のような柄縞式挂甲（末永1934, pp.118-121）は、今のところ、中期第5～7段階（須恵器のTK208～TK47型式期）の例しか知られていない。京都府宇治二子山南墳例（宇治市教育委員会1991、報告書は胴丸式挂甲とする）、奈良県新沢千塚109号墳例（奈良県立橿原考古学研究所1981）がある。また、椒浜古墳の花形飾金具や垂飾（和歌山県史編さん委員会1983）は、中期末の大坂府峯ヶ塚古墳例（笠井1992）と共通する。

2.4. 倭製冑への影響

堅矧広板鉢留式衝角付冑を型式分類・編年して、この系列の冑が後期第2段階に出現することを示す。また、その祖型が倭の衝角付冑と朝鮮半島の堅矧板鉢留式冑との折衷品であることを論じる。

2.4.1. 堅矧広板鉢留式衝角付冑の分類と編年（第4図）

この系列の冑は、後期第2段階に登場し、第4段階までの副葬例がある。型式分類と編年を次に説明する。

分類と編年の基準は、次の3つである。

1) 衝角部と伏板のつくり……………一連のもの／別造のもの

一連のものが古く、別造のものが遅れて現れる（小林1974, pp.60-61）。

2) 地板の枚数……………7枚／9枚／11枚

枚数の少ないもの（7枚）から多いもの（9枚、11枚）に変化する。

3) 鉢留の間隔……………密鉢留～疎鉢留

密鉢留から疎鉢留に変化する。疎密の基準には、地板間を留める鉢の数を用いる。9鉢（？）～2鉢の例がある。

1)～3)の各属性の変化の順序は、同一遺物における他属性との共存関係が矛盾しないので、第4図のように編年する。

冑の型式学的段階区分は、挂甲の区分と一致させた。共伴挂甲の資料が公表されているもの

段階	後期第2段階		後期第3段階		後期第4段階		実測図・模式図
	衝角部と伏板	地板数	衝角部一連	別造	衝角部別造	地板数	
衝角部 と伏板	7枚?	7枚				9~11枚	
地板数			密鍛留	←	→ 疊鍛留		
筋間隔	地板間9鍛留?	地板間6~7鍛留		地板間5鍛留	地板間2~3鍛留		
鍛留							

0 40cm

第4図 堅別広板鍛留式衝角付冑の分類と編年 (S = 1/10)

第4図 堪矧広板鉢留式衝角付冑の分類と編年 (S = 1 / 10)

1	大阪府 南塚古墳	小林編1959、p.85の写真をトレース。
2	埼玉県 大宮古墳	村井1974、p.164.
3	千葉県 金鈴塚古墳	毎日新聞社1976、p.106の写真をトレース。
4	群馬県 諏訪神社古墳	側面図は末永1934、p.47. 平面図は筆者原図。
5	岡山県 王墓山古墳	村井1974、p.163.
6	群馬県 金冠塚(山王二子山)古墳	村井1974、p.166.
7	栃木県 足利公園麓古墳	栃木県1927、pp.44-45、写真をトレース。
8	埼玉県 小見真觀寺古墳	村井1974、p.165.

は、金鈴塚古墳（第4図3）が後期第3段階、諏訪神社古墳(4)・金冠塚古墳(6)・小見真觀寺古墳(8)が第4段階である。南塚古墳例(1)の共伴挂甲は未報告だが、金鈴塚古墳(3)の前段階であることと、共伴する須恵器・馬具型式と甲冑編年の並行関係から、後期第2段階と判断する。

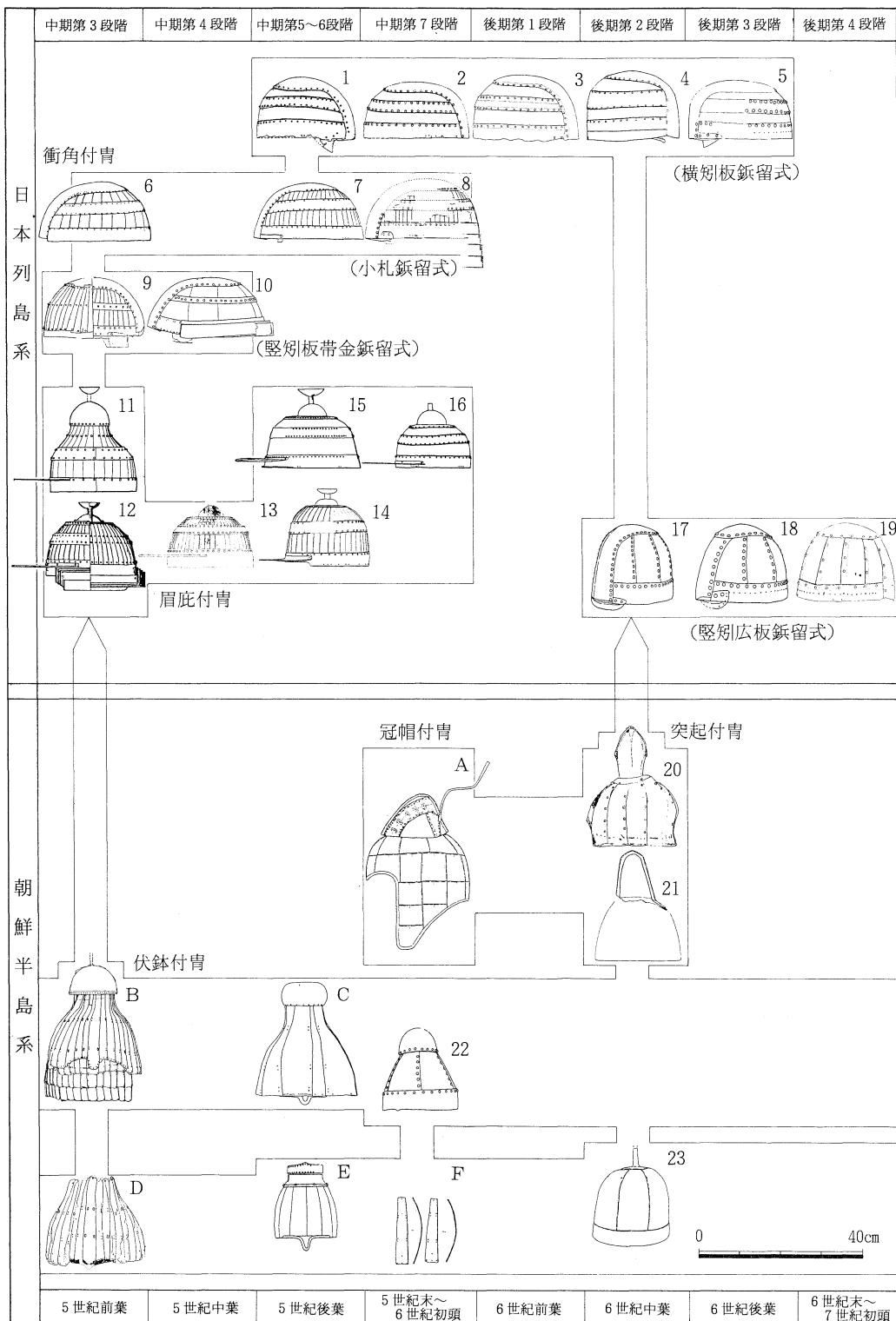
甲冑編年の後期第2段階は、須恵器のTK10新型式（田辺1981、pp.40、43、MT85号窯段階）と一部が並行する。大阪府南塚古墳の須恵器は、MT15型式^[6]とTK10新型式^[7]がある。衝角付冑は追葬棺に伴う（川端・金関1955）ので、TK10新型式並行と考える。

2.4.2. 堪矧広板鉢留式衝角付冑の成立

堪矧広板鉢留式衝角付冑の初現型式の遺物が、後期第2段階の大坂府南塚古墳例である。公表された写真（小林編1959、p.85）から、衝角伏板一連・地板7枚・9鉢留の形制と推定する。

この形制は、倭の伝統的な形態（form）である衝角付冑に、堪矧板鉢留式冑の製作手法を取り入れて成立した折衷品だと考える（第5図17）。1) 幅の広い堪矧地板間を複数の鉢で留めること、2) 脊卷板を使わないこと、3) それまでの倭系冑より鉢が急に深くなること、が朝鮮半島系冑から取り入れた要素である。その前の横矧板鉢留式衝角付冑（第5図1～4）とは差が大きく、倭の中での自然な型式変化はたどれない。

その成立期は、後期第2段階の甲冑の時期である。渕の上1号墳・綿貫觀音山古墳の朝鮮半島系冑（第5図20、21）が用いられた時期と一致する。伝川上神社古墳の堪矧板鉢留式冑（第5図23）も、同じ後期第2段階の可能性がある。



第5図 朝鮮半島系胄から日本列島系胄への2回の影響 (S = 1/16)

第5図 朝鮮半島系冑から日本列島系冑への2回の影響 (S=1/16)

- 1 宮崎県 小木原1号墳 宮崎県総合博物館1979、p.46.
- 2 熊本県 江田船山古墳 1号冑 本村1991、p.257.
- 3 愛媛県 東宮山古墳 村井1974、p.156.
- 4 埼玉県 永明寺古墳 栗原・塩野1969、p.60.
- 5 千葉県 城山1号墳 古墳文化研究会1990、p.28.
- 6 京都府 久津川車塚古墳 村井1974、p.154.
- 7 群馬県 鶴山古墳 右島1987、p.17.
- 8 茨城県 武具八幡古墳 滝沢1986、p.58.
- 9 京都府 久津川車塚古墳 末永1934、p.37.
- 10 徳島県 恵解山1号墳 元興寺仏教民俗資料研究所・保存科学研究室1977、p.57.
- 11 奈良県 五条猫塚古墳 石室外調査前出土冑 網干1962、p.71.
- 12 滋賀県 新開1号墳 南遺構 西田ほか1961、p.44.
- 13 奈良県 五条猫塚古墳 石室内東側出土冑 網干1962、p.75.
- 14 群馬県 鶴山古墳 右島1987、p.17.
- 15 兵庫県 亀山古墳 梅原1939、図版第16.
- 16 山梨県 豊富村出土 後藤1937、p.114.
- 17 大阪府 南塚古墳 小林編1959、p.85.写真からトレース。
- 18 千葉県 金鈴塚古墳 每日新聞社1976、p.106.写真からトレース。
- 19 群馬県 金冠塚(山王二子山)古墳 村井1974、p.166.
- 20 群馬県 緜貫觀音山古墳 梅沢1990、p.67.
- 21 福島県 渕の上1号墳 筆者原団。
- 22 和歌山県 椒浜古墳 末永1934、図版16.写真からトレース。
- 23 伝 愛媛県 川上神社古墳 愛媛県史編さん委員会1986、p.529.写真からトレース。
 - A 慶尚南道 陜川 磻渓堤外A号墳 国立晋州博物館1987、p.59.
 - B 釜山 福泉洞11号墓 釜山大学校博物館1982、pp.91-92.
 - C 慶尚南道 陜川 玉田70号墓 趙1988、pp.237-238.
 - D 釜山 福泉洞10号墓 釜山大学校博物館1983、pp.67-68.
 - E 伝 朝鮮半島南部出土 穴沢・馬目1975、p.16原図。穴沢1988、p.770の注(22)により
改変。
 - F 全羅南道 南原 月山里M1-A号墳 全1983、p.48.

3. 論議

3.1. 朝鮮半島の身分表示胄

冠帽系胄は普通の武具ではなく、冠帽の身分表示機能を合わせ持つ。冠帽系胄が確認されている5世紀後半～6世紀前葉の伽耶地域で、軍事的職能と政治的身分が深く関連していたことを意味する。軍人が社会的にも高い身分を持ったか、または身分の高い人物が軍事指導者を兼任したということである。社会的・軍事的緊張の高い社会を復元できる。

6世紀中～後葉以後、冠帽系胄の身分秩序が崩れたか、それにかわる新しい制度が整備されたのだろう。朝鮮半島の冠帽系胄は突起付胄に変化し、さらに、冠帽も副葬されなくなってゆく。

3.2. 古墳時代中期と後期の朝鮮半島系胄と倭

古墳時代の倭の胄には、朝鮮化現象が2回ある（第5図）。中期第3段階（古墳時代中期中葉）と、後期第2段階（後期中葉）である。上下2段の横長の地板（三角板や横矧板）を胴巻板で合わせて作るそれまでの倭系胄が、このとき、縦長の地板（堅矧板）を使うように変化する。

この2回の画期には、胄以外にも朝鮮半島系の各品目・各技術がまとまって流入する。朝鮮半島と日本列島との交渉が活発化した時期である。

3.3. 古墳時代後期の突起付胄と倭

朝鮮半島系の突起付胄が日本の後期古墳から出土することは、突起付胄を持つ政治的・軍事的身分を持って、朝鮮半島のおそらく伽耶地域で活動した人物が6世紀の半島一列島間の政治的交渉にあたって往来した可能性を示す。冠帽系突起付胄は限定された着用者の身分を示す標識であり、単なる輸出品として倭に渡ったとは考えにくいからである。

日本列島に来た突起付胄は、身分標識として定着しなかった。その形態（form）を倭の甲胄様式に取り入れた様子がないからである。渕の上1号墳のような小古墳（円墳？）が突起付胄を副葬することから、倭では身分標識の用をなさないために、二次的な所有者へ移動したのもしそれない。朝鮮三国や伽耶と倭の社会成層（地位の序列）の中味が違い、また、倭の身分制（制度化された地位体系）の整備が遅れていたことが背景だろう。

胄だけでなく、挂甲や金銅製品類（飾大刀・金銅装馬具・装身具）も朝鮮半島から古墳時代の日本列島に持ち込まれ、一部は倭に定着して模倣生産される。これらは、朝鮮三国や伽耶の社会の身分標識であった。朝鮮側の社会から見て、社会的身分の格付けを全く伴わない、単なる輸出品だとは考えにくい——最終的な倭の所有者が、遠来の珍しい宝物としか見ていなかつたとしても。また、倭でも一部は単なる威信財（prestige goods）でなく、身分標識（status symbols）の意味を持ち始めていた可能性がある。飾大刀についてすでに指摘されている（向坂1971など）。他の遺物と共に、さらに検討したい。

謝辞

この論文は、1989年12月に岡山大学大学院文学研究科に提出した修士論文「古墳時代金属製品の輸入・模倣・分配活動」の第4章を基礎にしている。また、1990年12月に奈良県立橿原考古学研究所で古墳文化研究会が開催したシンポジウム『後期古墳出土共伴遺物複合の編年』で口頭発表した。

修士論文の御指導をいただいた近藤義郎先生・稻田孝司先生・新納泉先生、朝鮮半島の考古学を学ぶ機会をいただいた西川宏・伊藤晃・亀田修一・平井典子・島崎東・土井基司の皆様、御意見・御教示をいただいた穴沢咲光・太田博之・宋桂鉉・田中晋作・野上丈助の諸氏と古墳文化研究会の諸氏に感謝いたします。

また、遺物調査の際にお世話を頂いた次の諸氏・機関に感謝いたします。

岡崎晋明・勝部明生・草野則雄・杉本宏・鈴木重美・関義則・高橋昌子・塙田良道・中嶋郁夫・野田晃世・橋本裕行・菱田哲郎・平野功・船山政志の諸氏。

福島県郡山市教育委員会・郡山市歴史資料館・福島県いわき市教育委員会・千葉県小見川町教育委員会・埼玉県行田市郷土博物館・東京大学総合研究資料館・静岡県磐田市埋蔵文化財センター・京都大学文学部博物館・京都府宇治市教育委員会・飛鳥資料館・奈良県立橿原考古学研究所。

〈註〉

- (1) 宋桂鉉氏は「冠帽形伏鉢冑」と呼ぶ。趙・朴1990, p. 26の注(4)参照。
- (2) 穴沢・馬目1986, p. 234参照。穴沢氏から御教示をいただいた。
- (3) 磐田市埋蔵文化財センターにて実見。中嶋郁夫氏の御配慮をいただいた。
- (4) 栗原・塩野1969参照。埼玉県立博物館にて実見。関義則氏の御配慮をいただいた。
- (5) 京都大学文学部1968, pp. 93-94. 実見にあたって、菱田哲郎氏の御配慮をいただいた。
- (6) 小林編1959、図版189の器台、同190の廳。横山1959、No. 37の蓋杯。川端・金闇1955, p. 68 実測図の装飾付脚付壺。

(7) 小林編1959、図版191の提瓶。横山1959の南塚様式の大部分。

引用・参考文献（筆者名 A B C 順）

- 網干善教 1962 『五条猫塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第20冊、奈良県教育委員会、奈良。
- 穴沢啄光 1988 「『蒙古鉢形』冑と四～七世紀の軍事技術」『考古学叢考』中巻、吉川弘文館、東京、pp.725-774.
- 穴沢啄光・馬目順一 1975 「南部朝鮮出土の鉄製鉢留甲冑」『朝鮮学報』76 朝鮮学会、天理、pp.1-34.
- 穴沢啄光・馬目順一 1977 「頭椎大刀試論」『福島考古』18、福島県考古学会、福島、pp.89-108.
- 穴沢啄光・馬目順一 1986 「福島県の古墳と横穴」『福島の研究』第1巻 地質考古編 清文堂、大阪、pp.200-248.
- 文化広報部文化財管理局 1978 『雁鴨池 発掘調査報告書』、ソウル。
- 趙榮濟 1988 『陝川玉田古墳群』I 木槧墓 慶尚大學校博物館調査報告第3輯、慶尚南道、晋州、pp.235-239.
- 趙榮濟・朴升圭 1990 『陝川玉田古墳群』II M3號墳 慶尚大學校博物館調査報告第6輯、慶尚大學校博物館、晋州。
- 愛媛県史編さん委員会編 1986 『愛媛県史』資料編 考古、愛媛県、松山、pp.528-529.
- 元興寺仏教民俗資料研究所・保存科学研究室 1977 「徳島県恵解山第1号古墳出土衝角付冑の保存処置」『古代研究』11、奈良、pp.54-57.
- 後藤守一 1937 『古墳発掘品調査報告』帝室博物館、東京、p.114.
- 群馬県立歴史博物館 1990 『藤ノ木古墳と東国の古墳文化』、高崎。
- 藤井和夫 1990 「高靈池山洞古墳群の編年——伽耶地域古墳出土陶質土器編年試案V——」田村晃一編『東北アジアの考古学「天池」』六興出版、東京、pp.165-204.
- 福尾正彦 1989 「岩戸山古墳出土の冑着装円体石人頭部に関する若干の考察」『古文化談叢』21 九州古文化研究会、北九州、pp.91-103.
- 船山政志・塚田良道 1991 「小針鎧塚古墳の挂甲」『行田市郷土博物館研究報告』2、行田、pp.1-30.
- 全榮來 1983 『南原・月山里古墳群發掘調査報告』圓光大學校馬韓・百濟文化研究所、pp.45,48.
- 笠井敏光 1992 「豎穴式石室を伴う前方後円墳——大阪府峯ヶ塚古墳」『季刊考古学』40、雄

- 山閣、東京、pp.81-82,85-86.
- 川端眞治・金関恕 1955 「摂津豊川村南塚古墳調査概報」『史林』38-5、史学研究会、京都、pp.63-68.
- 金鍾徹 1981 『高靈池山洞古墳群』啓明大學校博物館遺蹟調査報告 第1輯、啓明大學校出版部、大邱、pp.30-33.
- 小林謙一 1974 「甲冑製作技術の変遷と工人の系統（上）」『考古学研究』20-4、考古学研究会、岡山、pp.60-61.
- 小林行雄編 1959 『世界考古学大系』第3巻 日本Ⅲ 古墳時代、平凡社、東京。
- 古墳文化研究会 1990 『シンポジウム 後期古墳出土共伴遺物複合の編年』発表資料集、古墳文化研究会、大和。
- 国立晋州博物館編 1987 『陝川磻溪堤古墳群』、慶尚南道、晋州、pp.48,54,59,242.
- 郡山市編 1973 『郡山市史』第8巻 資料（上）、郡山、口絵14、図録265～269、p.10.
- 郡市教育委員会 1971 『福島県郡市安積町渕の上遺跡発掘調査概報』、東北地方建設局福島工事事務所・福島県郡市教育委員会、郡山。
- 栗原文蔵・塩野博 1969 「埼玉県羽生市永明寺古墳について」『上代文化』38、国学院大学考古学会、東京、pp.56-64.
- 京都大学文学部 1968 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部 日本歴史時代、京都、pp.93-94.
- 毎日新聞社編 1976 『重要文化財』28 考古I、毎日新聞社、東京、p.106.
- 右島和夫 1987 「鶴山古墳出土遺物の基礎調査Ⅱ」『群馬県立歴史博物館調査報告書』第3号、群馬県立歴史博物館、高崎、pp.13-32.
- 宮崎県総合博物館 1979 『日向の古墳展』、宮崎、p.46.
- 本村豪章 1991 「古墳時代の基礎研究稿——資料篇（Ⅱ）——」『東京国立博物館紀要』第26号、東京国立博物館、東京、p.257.
- 向坂鋼二 1971 「飾大刀について」『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』静岡県文化財調査報告書 第10集 静岡県教育委員会、静岡、p.47.
- 村井嵩雄 1974 「衝角付冑の系譜」『東京国立博物館紀要』9 東京国立博物館、東京、pp.7-216.
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1981 『新沢千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然紀念物調査報告第39冊、奈良県教育委員会、奈良、pp.301-314.
- 日本馬具大鑑編集委員会 1990 『日本馬具大鑑』第1巻 古代上、日本中央競馬会、東京、pp.19-20,24-25,93,106-107,136,173-177.

- 新納泉 1984 「関東地方における前方後円墳の終末年代」『日本古代文化研究』創刊号、古墳文化研究会、大和、pp.41-47.
- 西田弘・鈴木博司・金閔恕 1961 「栗東町安養寺古墳群発掘調査報告 二 新開古墳」滋賀県教育委員会編『滋賀県史跡調査報告』第12冊、大津、pp.34-57.
- 野上丈助 1991 「畿内における古墳埋納鉄器の変遷」『古代学評論』2 古代を考える会、大阪、pp.101-126
- 小野山節 1987 「武器・武具と馬具」『世界考古学大系』日本編補遺抜刷 天山舎、東京、pp.139-148.
- 釜山大学校博物館編 1982 『東萊福泉洞古墳群』 I (図面・図版篇) 釜山大学校博物館遺蹟調査報告 第5輯、釜山、pp.91-92.
- 釜山大学校博物館編 1983 『東萊福泉洞古墳群』 I (本文篇)、釜山大学校博物館遺蹟調査報告 第5輯、釜山、pp.67-68,156.
- 釜山大学校博物館編 1990 『東萊福泉洞古墳群』 II 釜山大学校博物館遺蹟調査報告 第14輯、釜山、pp.25-31.
- 定森秀夫 1987 「韓国慶尚北道高靈地域出土陶質土器の検討」『東アジアの考古と歴史』上、同朋舎出版、京都、pp.412-463.
- 桜井達彦 1987 「頭椎大刀の編年に関する一考察」増田精一編『比較考古学試論』、雄山閣、東京、pp.171-189.
- 清水和明 1990 「挂甲と付属具」「挂甲」『斑鳩藤ノ木古墳 第1次調査報告書』斑鳩町教育委員会、斑鳩、pp.43-82,362-375.
- 申敬澈(定森秀夫訳) 1982 「釜山福泉洞古墳群遺跡第1次発掘調査概要と若干の私見」『古代文化』34-2、古代学協会、京都、pp.1-74.
- 末永雅雄 1934 『日本上代の甲冑』岡書院、東京。1981年増補版、木耳社、東京。
- 高橋徹・小林昭彦 1990 「九州須恵器研究の課題」『古代文化』42-4、京都、pp.28-43.
- 滝瀬芳之 1986 「終末期の前方後円墳と飾大刀」『日本古代文化研究』3 古墳文化研究会、大和、pp.63-66.
- 滝沢誠 1986 「武具八幡古墳」増田精一編『武者塚古墳』、新治村教育委員会、新治(茨城県)、pp.56-70.
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店、東京。
- 栃木県 1927 『栃木県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第二輯、宇都宮、pp.44-45.
- 東京国立博物館 1983 『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇(関東Ⅱ)、東京。
- 禹枝南 1986 『大伽耶古墳の編年』ソウル大学校大学院文学硕士学位論文、ソウル。(定森秀夫)

- 訳「大伽耶古墳の編年」 西谷正編1990 『古代朝鮮と日本』名著出版、東京、pp.221-270に掲載。)
- 宇治市教育委員会編 1991 『宇治二子山古墳 発掘調査報告』 宇治市文化財調査報告書第2冊、宇治、pp.113-117.
- 梅原末治 1939 「在田村龜山古墳とその遺物」『兵庫県史跡名勝天然紀念物調査報告』第14集、兵庫県、神戸、pp.16-37、図版第8-20。
- 梅澤重昭 1990 「観音山古墳の発掘調査」『藤ノ木古墳と東国の古墳文化』、群馬県立歴史博物館、高崎、pp.58-80掲載。
- 内山敏行 1987 「遺物編年の現段階 武具」『古墳文化研究会研究発表・討論会 発表要旨 関東・東北地方の群集墳』古墳文化研究会、作並（宮城県）。
- 内山敏行 1990 「古墳時代後期の朝鮮半島系冑」『シンポジウム 後期古墳出土共伴遺物複合の編年』発表要旨、古墳文化研究会、大和。
- 和歌山県史編さん委員会 1983 『和歌山県史』考古資料、和歌山、pp.527-530、PL.213.
- 王克林 1990 「中国の古代軍事用防具・冑の起源と変遷」高崎市教育委員会編『古代東国と東アジア』河出書房新社、東京、pp.225-255.
- 横山浩一 1959 「古墳時代須恵器の編年略表」 小林行雄編『世界考古学大系』第3巻 日本Ⅲ 古墳時代、平凡社、東京。

研究紀要 第1号

発 行 平成4年3月31日

編集・発行 財団法人 栃木県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

〒329-04
栃木県下都賀郡国分寺町大字国分乙 474
TEL 0285-44-8441
FAX 0285-44-8445

印 刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
